

ユーラシア最奥部における興亡の歴史

関連キーワード: 内陸アジア、中央アジア、文化交流、オアシス、遊牧民、交通・交易、シルクロード

研究内容

ユーラシア最奥部（内陸アジア、中央アジア）における諸民族の興亡の歴史を研究しており、最近は特に交通・交易問題に関心を持っています。

この地域には険峻な山脈が横たわっており、古来、商人や旅人はそれらを苦勞して越えていかねばなりませんでした。現在、キルギス共和国東南部、中国との国境に程近い標高3,200メートルの地点にタシ・ラバト（「石の宿駅」の意味）と呼ばれる石造建築物が残されています。これは、15世紀初頭、「シルクロード」の交易路上に建設された隊商宿（キャラバン・サライ）です。タシ・ラバトは、ここを通過していった多くの人々に一時の安息の場を提供してきました。諸民族が織りなしてきた内陸アジア世界のダイナミックな交流の歴史を陰で支えてきた重要な遺跡の一つといえるでしょう。



タシ・ラバト（2023年8月、小沼撮影）

研究者プロフィール

- ・文学部 歴史学科 教授 小沼孝博
- ・専門分野 内陸アジア近世・近代史、新疆研究
- ・研究分野 歴史学
- ・所属学会 内陸アジア史学、日本中央アジア学会、東洋史研究会
- ・著書
『清と中央アジア草原：遊牧民の世界から帝国の辺境へ』東京大学出版会、2014年（単著）
Xinjiang in the Context of Central Eurasian Transformations (Toyo Bunko Research Library 18), Tokyo: The Toyo Bunko, 2018（共編著）

地域・産学官連携の可能性、事業化のイメージ他

- ・カルチャー教室、講演会、シンポジウムにおける講演や企画
- ・異なる角度からの「世界史」の学び直し
- ・海外（アジア）研修への助言

内陸アジアの歴史は「シルクロード」や「文明の十字路」という言葉に象徴されるように、多様な民族が交錯し、融合と分離が不断に繰り返されることで展開してきました。そこで活躍した人々の言語や文化は時代や地域により異なりますが、時としてモンゴル帝国などの強大な権力の下に統合され、周縁世界に大きな影響を及ぼしてきました。まさに「世界史」を突き動かすパワーの震源地だったといえます。海に囲まれた日本とは全く異なる歴史を歩んできた人々の営みを知るとは、自身を見直し、より深く理解する一歩になるでしょう。

研究者への連絡先

産学連携推進センター

Email srcenter@mail.tohoku-gakuin.ac.jp

電話 022-354-8122